

人口問題研究

第四卷 第二號

研究資料

民族優生の目的と方法 (二)

横 田 年

私は此の小論に於て日頃考へてゐた民族優生上の私見を纏めて見た。理論考察の進行過程には甚だ未熟なものがあつて全く誤謬無きを保し難い。大方の御教示を待つ次第である。

一、民族優生の目的

優生學は人類遺傳學を基礎として種々の淘汰作用を利用する事により人類を進化の方向に進ましめんとする應用科學である。そして之を創始したゴールトンにしても其後輩出した多數の優生學者にしても、其の思想の根

民族優生の目的と方法(一)

柢には己が屬する民族又は國民を愈々優秀ならしめんとする理想を抱懷してゐたのであるが、元來人類遺傳學は其の研究の手段としてこそ多數觀察を行ひ統計的處理を爲すが、研究方法の本質としては解析的研究即ち例へば二三の遺傳形質の組合せによる子孫の形質の變化の追究とか或は家系的研究等の方法を用ふる爲に主として個體の遺傳的觀察に主眼點が置かれ、従つて此の人類遺傳學に基く優生學も其の大きな目標としては民族の優生を掲げてゐるが、實踐的理論に於ては屢々個人的優生の立場から見た考へ方が混入し、迷路に踏み入つてゐるのではないかと思はれることがある。

若しも個人の優生の如き見地が許されるものならば、其の様な優生と明確に區別する爲に民族優生と云ふ言葉へは數年前本邦で民族衛生と優生の兩語を結び付けて造られたものであるが、を別に定義し使用する事は決して無意義ではないと思ふ。

扱、民族優生の目標とする處が民族中の優秀健全なる人々を増加せしめ劣悪なる人々を減少せしめんとするに在る事は言ふ迄も無いが、之を更に遺傳生物學的に具體的に表現すれば、民族中の優秀健全なる遺傳子の割合を増加せしめ劣悪なる遺傳子を可及的排除する事であると言ひ得るであらう。此の二つの表現(現象型的と因子型的)は同一の理想を單に言ひ變へたに過ぎないのであるが、其の實行の方法に於て相矛盾するかの如き感を與

へる事があるのであつて、此の點に就ては後段に詳説したいと思ふ。

民族優生の意圖する輪廓をより明かにする爲に私は此處に個人的優生との比較を若干の通俗的比喩によつて説明しよう。

個人的優生として考へられる處は或個人が己れよりも優秀な配偶者を得てより良き子孫を得んとする事であらう。斯くの如き立場に於ける個人優生は民族優生とは何等の關聯をも有せず時に矛盾する事さへ有り得る。例へば此處に一人の未婚男子があつたとし、之が配偶を求むる時に己れより優れた素質を有する女子を選択せんとする事は、其の男の立場からすればより良き子孫を得て己が血統を優良ならしめんとする心情から出たものであつて常識的には優生的と考へられ易い。一步を譲つて斯くの如き場合を其の男の個人優生に適つたものとしても、直ちに之を民族優生的なりと稱する事は出来ない。何となれば結婚年齢及び出産力に差異なき限り此の凡凡たる男が優秀なる女子を配偶に得ようが或は己れと等しく平凡なる女子を得ようが、民族全體に於ける此の男の有する遺傳子の増殖の割合には何等の差異も認められないからである。此の男の遺傳的素質が平均以下である場合には寧ろ同様平均以下の女性を妻とする方が民族優生的なりと考へられる理由さへ存する(後段参照)。更に極端なる場合を例にとれば、或家の長男に低能にして魯鈍或は癡愚とも診斷せらるべき未婚男子があり、其の家の血統を維持せんが爲に親族相計つて之に頭腦優れたる一女性を妻合せ以て優生的結婚を行ひたりとする場合も世の中にはあり得るが、斯くの如きは精神薄弱(低能)の遺傳子を民族の血の内に保存し更に増殖して行く事となる故全く民族優生に反することと言はねばならぬ。

個人優生は又相互の間にて相対し反撥する事が有り得る。同程度の遺傳的素質の者同士が結婚する場合は夫々の個人優生的立場より見た價值

に於て相等しいが、配偶兩者の素質に相當の懸隔が有る場合は劣等なる者の側より見れば優生的であるが、より優れたる者の側よりすれば非優生的なりとされよう。併し民族優生的には何れの場合も同一であつて、たゞ配偶たらんとする男女の結合により現象型に於て良き子孫を産み得るや否や、及び其の男女の有する遺傳子が相共に民族中に於て増殖する事が民族全體にとつて好ましきや否やが問題となるのみである。

個人優生的立場は斯くの如く相對的のものであり絶對的の價値の無いものであるから、大にしては國策の上に於て優生學の方策を決定するに際しても小にしては結婚相談等に於て個人優生の忠告を與へんとするに際しても、常に確固たる民族優生的見地に於て行動すべきであつて毫も個人優生を省みてはならぬものと私は考へる。

以上述べ來つた様な民族優生の目的に私は更に次の如き重要な一事項を附加したいと思ふ。それは我々日本民族が代々遺傳して來た民族的特徴(民族優生が遺傳生物學の見地に立つものであるから此の民族的特徴に就ても此の場合生物學的表象に限る事としたい。従つてたとへ精神的特徴であつても生物學的に遺傳し得る形質に就ては此處で論ずるのである。其他の文化的特徴は民族優生の關する範圍に屬しないものであつて他の科學の分野に於て論ぜられるべきである)を永遠に我々の子孫に傳へて行く事である。斯くの如く我々日本民族の有する遺傳生物學的民族的特質を我々の子孫への遺産として永へに傳へて行かうとする努力こそは民族優生の目的の中でも寧ろ第一義的の意義を有するものである。何となれば民族中の優秀健全なる人々を増加し劣悪なる人々を阻止する事のみが民族優生の目的であるならば、之は一定の民族の理想とするに越するのみならず、世界人類の等しく望む處であつて寧ろ人類優生と稱する方が至當かも知れない。

い。それにも拘らず我々が民族優生を主張する所以は我々が前述の如き崇高なる理想を常に抱いてゐるからである。今日我々が選ぶべき民族優生の諸方策も此の見地に立脚してこそ初めて正當なる方法への道を知る事が出来る。例へば大東亞共榮圈建設の途上に於て最も重要な問題として論議されてゐる日本民族と他民族との混血の問題も、單に民族の質の見地からのみ云々すれば、方法如何（例へば他民族の内でも遺傳生物學的に特に優秀なるもののみ日本民族との混血を許可する等の如き）に依つては混血により日本民族が特に著しき損失を蒙る事が無いばかりでなく、或種の形質に就ては寧ろ混血を利益とする場合も理論的には無きにしも非ざること（即ち雜種強勢の現象）は今日迄の多くの諸學者の業績を検討して推論し得る處であるが日本民族の特質を我々の子孫の血の中に永遠に保持せんとする目的からすれば、混血によつて此の遺傳的特質が稀薄になる事は當然であるから、我々は斯くの如き意義に於ける民族優生の立場に於て斷乎として混血に反對し得る理論的根拠を見出し得るのである。

二、配偶選擇による淘汰の民族優生の意義

人口中に於ける遺傳子のヘテロ化とホモ化

配偶選擇による淘汰の民族優生の價値は從來非常に重要視されてゐるが、之が如何なる機轉によつて淘汰を進行せしめるかに就ての分析は未だ十分に行はれてゐたとは言ひ難い。

配偶選擇による淘汰の方法を我々は大體二つの種類に分ける事が出来る。第一の方法は人口を構成する各個體が夫々より優秀なる異性或は優秀なる家系に屬する異性を配偶に求めんとし、他方劣悪なる遺傳的素質を有する異性若くは有するらしく見える異性をなるべく避けんとする事である。

民族優生の目的と方法(一)

り、第二は血族結婚或は更に廣範な意義を有する同族結婚による方法である。

私は先づ顯性遺傳を爲す形質に就て斯くの如き配偶選擇が如何なる影響を及ぼすかを検討し、次で潛性遺傳形質に論及し度い。又論旨の複雑化を避ける爲に單顯性遺傳と單潛性遺傳に就てのみ論ずることとする。其の他の遺傳形式に關しても多くは此の兩者の結論から歸納し得る事と思ふ。

扱、今此處に顯性遺傳の型式を取る何等かの形質があつたとする。或人間の因子型が此の形質に關しホモ（一對の遺傳子が相同であること）であつてもヘテロ（一對の遺傳子が非相同なること）であつても、顯性遺傳を爲すのであるから此の遺傳子を有する者の現象型は常に此の遺傳子の性質を表現してゐる。（發現率の低い顯性遺傳の場合を除く）若しも此の形質が民族にとつて好ましきものであるならば、此の形質を有する者が結婚し子供を産むことにより因子型がホモであつた場合は一〇〇%、ヘテロであつた場合は二分の一の割合に於て子孫に因子型に於ても現象型に於ても此の形質が遺傳するのであるから、當然我々は斯くの如き者の結婚を奨勵し同時に多産たらしめねばならない。又我々が何を増殖せしめねばならぬかと云ふ對象を探し出すにも甚だ簡單であつて現象型に於て此の形質を有する人々のみに關心を有すれば良いのである。

逆に此の顯性遺傳形質が民族にとつて甚だ好ましからざるものである場合も、我々は此の形質を現象型に於て有する人々のみを目標とすれば良いのであつて之等の人々の結婚禁止或は斷種等により容易に民族優生上の目的を達する事が出来る。

顯性遺傳形質に就ては斯くの如く配偶淘汰に於てとるべき方法が實に明瞭に示されてゐるが、之に反し潛性遺傳を爲す形質に就ては其の向ふべき

處は明かなるにも拘らず、淘汰の方法に於て屢、混迷に陥り易い。

例へば或形質があり之が特に優秀なるものは潛性遺傳を爲し、平凡なものは顯性遺傳を爲すものと假定しよう。すると此の形質に關し現象型に於て優秀なる人は其の因子型に於て優秀なる性質を有する潛性遺傳子がホモとなつてゐる筈であり、現象型に於て平凡なる性質を有する人々は其の因子型に於て平凡なる性質を有する顯性遺傳子に關しホモであるか或はヘテロであるかの何れかである。今民族優生の立場に於て現象型に於て人口中の此の優れたる性質を有する人々を増加せしめる爲には、第一に此の潛性遺傳子に就きホモである處の優秀なる人々の結婚を奨励し多産たらしめねばならない。此の潛性遺傳子に關しホモの個體が同じくホモである個體と結婚するか或は少くともヘテロである個體と結婚すれば、其の産むべき子供にも此の潛性遺傳子に關しホモである個體の出現を期待する事が出来るが、若し顯性遺傳子に就きホモなる個體と結婚するならば、其の子供には此の潛性遺傳子に關しホモの個體は全く生じ得ず、孫或は其以後の子孫に於て他の劣性遺傳子と遭遇する事により始めて現象型に於て優秀なる子孫を生じ得るのである。若しも此の優れたる潛性遺傳形質が甚だ稀なるものであるならば、其のホモなる個體が他の平凡なる個體と結婚し、更に其の間に産れた子孫が夫々他の系統に屬する人々と結婚する時は、此の遺傳子は無数の人口の中に分離擴散し、之を再び結合せしめる事は容易な業ではなく殆ど不可能なりと稱してもよいであらう。此の潛性遺傳形質に關しホモなる個體を人口中に可及的多數出現せしめ、同時に明確に其の遺傳子の所在を知る爲には、此の遺傳子を有する人々(ホモなる人々)又は有すると思はるゝ人々(ヘテロなる人々)が相互に結婚し得る如き機會を作らねばならない。其の爲にはホモなる個體の屬する血統の人々が相互に結婚する事

が必要であり、従つて狭い意味に於ては血族結婚(法律上禁止されたる範圍を論ずるものに非ず)、より廣い意味に於ては同族結婚が必要となつて來るのである。勿論此の様な血統が多數存在するならば敢て血族結婚に依らずとも其等の血統相互の間に婚姻關係が生ずる様にすれば良い。

以上の場合と逆に或形質を正常ならしむる遺傳子が顯性遺傳形式となり、其の形質を民族の爲甚だ好ましからざる劣悪なる性質として表す様な遺傳子が潛性遺傳の形式をとる場合は如何であらうか。此の場合は最も議論が沸騰する處である。現象型に於て此の劣悪なる性質を有する人々の因子型は劣悪なる性質の遺傳子(潛性)に關しホモであり、正常なる性質を有する人々の因子型は正常なる性質の遺傳子(顯性)に關しホモであるか又はヘテロ(潛性因子と顯性因子を一個づゝ有する)である。民族優生上から劣悪なる性質を有する人々を減少せしむる爲には先づ潛性因子に關しホモなる人々の結婚を禁止するか或は斷種(現行國民優生法の目的とする如く)しなければならぬ。現象型に於て斯くの如く劣悪なる人々に對する處置に關しては今日何人も異論が無いのであるが、因子型に於て此の一個の潛性遺傳子を有するヘテロの人々の結婚に對する多くの人々の考へ方に就て私は疑問を抱いてゐる。若しも之等のヘテロの人々が所謂優生學的指導により、同一血族の人々と結婚して此の遺傳子が重複し其の子供の現象型に於て劣悪なる性質を有する者を出す事を避けん爲に、此の遺傳子が恐らく存在しないであらうと思はれる他の血統に屬する人と結婚せんと努めるならば、成程一時は現象型に於て劣悪者を出す頻度が少くなる如く見えるが、決して本質的に其の遺傳子が減少したのではなく、寧ろ斯くして此の遺傳子は殆ど何等の淘汰も受けることなく人口中に擴散し漸次増殖して行く事となる。即ち此の劣悪なる遺傳子に關しヘテロならんと思はるゝ人々を相

互に結婚せしめざる如き方針は正常なる人々の犠牲に於てヘテロの個體を増加せしめるものであり、全く民族優生に反する方法と言はねばならぬ。私は之に反し、ヘテロの個體を可及的相互に結婚せしめ其の子孫に生じ來れるホモの個體を國民優生法により斷種する事により眞に民族優生の目的を達し得るものと考へてゐる。(之により現象型に於ては一時的にホモの個體の増加を見るかも知れない。併しヘテロの個體は漸次減少するのであるから窮局に於てホモの個體も本質的に減少して來る。)此の爲には現象型に於て劣悪なる形質を有する人の一族の人々の間に於て結婚が行はれる如く指導すべきであり、従つて之等の人々の間に於ける血族結婚又は同族結婚が望まじきものと考へるのである。又若し此の様な血統が多數存するならば敢て血族結婚によらずとも之等の血族相互の間に結婚が行はれる様になれば良い。

以上を要約すれば、形質の優劣如何を問はず血族又は同族結婚を避けしめんとする今日の方向は寧ろ無選擇結婚に一致するものであり(多數の人口が相互に無選擇に結婚する場合は血族結婚の行はれる頻度は非常に僅かなものとなる)、人口の遺傳子のヘテロ化を招來するものであり、従つて人口の平均化、均質化を招くものである。

以上の如く良き遺傳子をホモにする事により現象型に於て優秀なる個體を増加せしめ、悪き遺傳子をホモにする事により現象型に於て劣悪なる個體を出現せしめ之を淘汰の目標とする(此の兩者を合せて人口の遺傳子のホモ化と稱したい)事は民族優生上採るべき一つの手段ではあるが、之のみでは優秀健全なる個體を積極的に増加せしめる事は出來ない。何となれば若しも一般人口の結婚年齢と出産力が其等の人々の質的差異により何等差別無きものとすれば、或形質に關する遺傳子がホモにならうともヘテロ

にならうとも其の遺傳子の人口中に於ける増加の割合には全く變りがないから、ホモの個體を増加せしめると同時に因子型に於ける優秀なる遺傳子の割合を増加せしめる事は不可能である。遺傳子の割合自身をも増加せしめる爲には之を有する人々の結婚年齢を早め出産力を平均以上に強めねばならないのである。

人口の遺傳子のホモ化を必要とする事に就て私は更にもう一つの論據を持つてゐる。今日世界中に見る如き多數の夫々特徴ある人種(たとへそれが殆ど純粹のものを見出し得ない迄に混血してゐるとは言つても、或基本型に屬する相似の形質を有する人種群に分類する事は可能である)が太古に於て生じたのは恐らく極く狭い範圍の地域に部族が相互に隔離して住んでゐる間に突然變異により今日の人種の夫々の祖先が生じ、之が長い間其等の種族の間のみで結婚し増殖して行つた爲であらう。今日も此の様な突然變異(勿論人間の有する形質全部の突然變異ではなく、或一部の形質例へば毛髮の色の如きものでも)が人々の間に起りつゝあることを否定し得る根據はない。例へば一組の黒髮の夫婦の間に突然赤毛の子供が生れることがある。之は赤毛に關する潛性遺傳子を此の夫婦兩人が持つてゐる事が偶然一緒になつた爲に赤毛の子供を生じたものと一般に説明してゐるし、又實際其の様な場合が大部分であらうが、理論的には其の中に突然變異により赤毛を生じた場合も想定し得ると思ふ。若しも此の様な事が太古に於て而も周圍から隔絶された地域で起つたものならば、當然此の子供達自身又は其の子孫の間に血族結婚が行はれるから、此の赤毛の遺傳子は長く保存され、而も環境が特に赤毛の人々の増殖に有利ならば遂には多數の人口に増殖し、今日の人種と稱し得る程の數を有するに至ることも可能であつたかも知れない。併し現在では偶、突然變異により新しく或種の形質

が生じても忽ちにして此の遺傳子は人口中に擴散してしまひ、其の行方を
知る事が出来なくなる。即ち今日の世の中では新しい人種の出現は到底期
待し得ないのである。

それはさておき、現在の人類の間に突然變異が起りつゝあることは、種
種の遺傳病が自然淘汰や社會淘汰により減少しつゝある筈であるのに時代
の経過と共に減少せざるのみか寧ろ増加する勢さへ見られる（之を専ら之
等の遺傳病を有する人々の特に著しき出産力に歸する事は無理であらう）
のは人口中之等の疾病の遺傳子が常に突然變異により新しく發生しつゝ
ある爲であると説明すれば了解出来る事によつても納得出来るし、又抑も
之等の遺傳病の遺傳子が何れも最初は突然變異により生じたものであるこ
とは疑ひないことであるから、同様の事實が今日に於ても起りつゝある事
を否定し得ないであらう。劣悪なる遺傳子の突然變異による新たな發生を
肯定し得るものならば、正常なる形質に就ても又優秀なる形質に就ても突
然變異による新しき出現を期待し得られる。若し斯くして生じた新しき優
秀なる形質が潛性遺傳の型式をとるならば、今日の如く血族結婚を排斥し
てゐる時代に於ては折角生じた良い遺傳子もホモになり得ざる爲に現象型
として表面に現れる機會を逸し、多數の人口中に擴散して宛も大海の中に
一握りの精製せる鹽を溶かした如くに何處に行つてしまつたか判らなくな
るのである。殊に人口の數が増加し配偶選擇の範圍が廣くなる程此の稀ら
しき突然變異により生じた遺傳子同士が相會してホモになる確率は殆ど零
に等しい。ホモになり得なければ我々は此の遺傳子をヘテロとして有する
個體を外觀上判別する事が出来ないものであるから其の在處も知り得ず、從
つて之を増殖せしむべき途も無いわけである。

現在の科學の程度では人工突然變異により人間の有する遺傳子を優秀化

せしめることは不可能であるし近い將來に實現し得べしとも思へないか
ら、せめて自然的に生じた突然變異のみでも之を捕へて増加せしめて行く
事は今日我々のとるべき義務ではなからうか。

而して此の自然的突然變異により生ずる優秀なる潛性遺傳子をホモにす
る方法は之こそ血族結婚を描いて他に求める事は全く不可能である。

以上の様な見地から私は屢、優生學者の間に見受けられる處の血族結婚
阻止の意見に反對するものである。勿論血族結婚の危險を説く人々も、之
により新しき劣悪なる遺傳病が生ずるのではなく、たゞ二つの劣悪なる性
質を有する潛性遺傳子がホモとなる確率が大である事に立脚してゐるので
あるが、成程血族結婚の或場合は其の當事者にとつては其の子供に劣悪な
る形質を有する個體を生ずる危險が有り得るから、其の個人の優生的立場
に於ては血族結婚は否なりと爲し得るかも知れないが、此の場合に於てさ
へも民族優生的の大きな見地からすれば淘汰の進行を速かならしめ得る機
會を掴む事が出来るのであつて、血族結婚を危険なりとする能はざるのみ
ならず、寧ろ淘汰の重要な一手段と考へ得るのである。

此の様に血族結婚が民族優生上頗る有利な淘汰方法である事が一般に了
解されても、一般人口の血族結婚頻度が今日以上に高率になる様な時は恐
らく來ないであらう。何となれば通婚範圍は時代の進むに伴つて愈々擴大
して行くものであつて、往時の如く交通が比較的制限されて居り極く小範
圍の地域内で結婚が行はれてゐた頃、而も其の民族の間に血族結婚に關す
る何等のタブーも存せざりし場合には其の頻度は相當に高率であるが、近
代文明の發達と共に人口の移動が頻繁に行はれることにより配偶選擇の範
圍が擴張し、就中都市の膨脹は周圍の農村を始め各處から莫大な人口を流
入せしめる結果、其處には相互に近親的血縁關係の比較的稀薄な人々の集

團を生じ、従つて血族結婚或は同族結婚の行はれる機會は非常に減少する。斯くして放置しておいても血族結婚は將來愈々少くなるべき運命にあるが、之に拍車をかけるが如き今日の血族結婚否定の傾向は私の考へる處では誠に遺憾なりとせざるを得ない。たとへ大都市に居住する人々の間に於ても、血族結婚と迄行かずとも少くとも己れと郷里を等しくする人々との間に於て同族結婚を行ふ様な氣風を作り上げてゆきたいものである。

人口に於ける遺傳子のホモ化を達成する方法は此の様な血族結婚又は同族結婚のみではない。或形質に就て優秀なる者は優秀なる者同士、平凡なる者は平凡なる者同士、劣等なるものは劣等なる者同士の間に於て結婚せしめる如き方法もホモ化を實現する一つの淘汰手段である。世俗的には己れよりも優秀なる素質を有する者を配偶に選ぶことを以て優生的なりとされ易いが、民族優生上からは之を全面的に肯定する事は誤謬であつて、寧ろ己れと相等しき素質を有する者を配偶に求めしむる方がより民族優生的なりと考へられる。

動物の間に於ける配偶選擇による淘汰が何故に其の種の進化に役立つかと言ふに、彼等(多くは雄性)の間に於て最も強大なもの又は最も異性の注意を集め得るものが最も生殖の機會を得るに反し、多數の劣弱な又は異性に對し魅力少きものは全く生殖の機會を得られない爲、之を幾世代も繰返す間に一定の方向に進化して行くのである。人類に於ても未開なりし頃は之と略、同様の事實が見られたのであるが、今日の如き文化諸國の間では一夫一婦制度の確立と可及的總ての人をして配偶關係に入らしめんとする方針と、之に加ふるに男女兩性の數的比率の略、相等しきことにより前述の如き配偶選擇は民族優生的には餘り意味が無くなつたのである。然るに一般の人々が配偶選擇が著しき効果がある如く誤解してゐるのは専ら自己

民族優生の目的と方法(一)

中心に考へてゐるからであつて、總ての人をして婚姻せしめんとする場合は個人間の競争が民族全體の上に及ぼす影響は非常に微弱なものとなつて来る。何となれば甲なる男が優秀なる女子を得るも平凡なる女子を得るも甲の有する遺傳子の民族全體に於ける増殖の割合には何等の差異も無いし、又逆に之等の女子の有する遺傳子の増殖の割合にも變りがないからである。勿論、配偶選擇の競争の結果、遺傳的に質の良い者程早く結婚して多數の子供を産み、素質が劣る程婚期が遅れて子供の産み方が少い様な現象を生ずるならば、甚だ有意義であるが、現實の状態は之と全く逆であつて、選擇に長い時間を費すものは多くは比較的優秀なる人々であり、優秀ならざる人々の方が寧ろ早婚である如き事實を屢々見受けるのである。

又、若しも何等かの事情により男女兩性の内の一方の人口が他方に比して著しく少い様な状態を現した時には、少い方の性に屬する者が己れより優秀なる異性を求めても、數的割合から見ても不均衡でないばかりでなく、民族優生的と稱し得る事も有り得ようが(劣等なる者が過剩となつて配偶を得られない爲に)、男女兩性の數が略、相均衡してゐる時は前記の如き事情により却つて優秀なる人々の晩婚と出産率低下を招くことも起り得る。

私は併し配偶選擇を全然無價値なりとするものではなく、或形質につき優秀なるものはなるべく己と同價値なるものと結婚して次代の人口の現象型に於て可及的多數の優秀者を輩出せしむる様にすべきであると考へるのであつて、配偶選擇を單なる個人優生の手段としてのみ觀るべきではないと主張するものである。要するに己れに應じき配偶を選ばしむることこそ眞に民族優生的なりと言ひ得るであらう。